

患者を生きる

4494

膀胱がん、27年目の選択③

全国で中小企業を支援するコンサルタントの小出宗昭さん(63)は2022年夏、膀胱^{ぼうこう}を全摘し、おなかに尿の出口(ストーマ)をつくる手術を受けることを決めた。膀胱がんがわかってから、27年目の決断だった。

9月、静岡県立総合病院で、術前の抗がん剤治療がはじまった。化学療法を受ける部屋はいつも、患者であふれていた。働き盛り世代の人も多かった。「がんは2人に1人になるっていうけれど、本当なんだな」と実感した。心配した副作用は、ほとんど出ず、個室の病室に電話とパソコンをもちこんで、仕事を続けた。入院のため、予定していた仕事は、電話かオンラインに切り替えた。

スーツ着るため入念準備



看護師お手製のストーマの模型。手術前に見せてもらい、イメージがわいた。静岡県市

切り替えられない仕事は、手術後に予定を延期した。実はもうひとつ、心配なことがあった。手術のあと、これまで通りスーツを着られるのだろうか？

10月、2度目の抗がん剤治療で入院中に、ストーマをつくる準備のため、ベテランの皮膚・排泄^{はいせつ}ケア認定看護師(55)と初めて面談をした。「僕は回腸導管でいきます」と単刀直入に話したあと、「スーツを着て仕事を続けるために、一番よい選択をしたいんです」と伝えた。

看護師は、小出さんの仕事ぶりや普段の様子を聞き取りながら、スーツを着ても違和感がなく、動きまわってももれの心配がないものを、と考えていた。小出さんの肌のしわや、筋肉の状態も確認したあと、看護師は「次の面談のときに、スーツを持ってきてください」と言った。

小出さんのスーツは、細身のタ

イプが多かった。急いで服のメーカーに問い合わせ、ウエストと脚まわりを最大限、広げる補修を依頼した。

11月、補修したスーツを病室に持参し、赤い梅干しのようなストーマの模型と装具を、実際におなかに貼って、位置や付け心地を確かめた。スラックスのベルトを締めても、座っても圧迫されないか。見た目に違和感はないか……。入念に確認をして、ストーマをつくる位置を決めた。

スーツは、ウエストを4センチほど、脚まわりも数センチ広げること、従来の物が着続けられそうだとわかった。

それから、ストーマケアについてのYouTube動画を、繰り返し見てイメージトレーニングにはげんだ。

(鈴木彩子)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryo-k@asahi.comへお寄せください。



朝日新聞アピタル

「患者を生きる」は、医療サイト「朝日新聞アピタル」(<http://www.asahi.com/apital/>)でも、ご覧になれます。